

2025年度

湘南白百合学園中学校

入学試験問題

国語

45分

受験番号		氏名	
------	--	----	--

○受験番号・氏名は解答用紙にも書くこと。

—
後の問いに答えなさい。

*答えは解答用紙に書きなさい。

問一 次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① シキ者を見て歌う。
- ② 名前をレンコする。
- ③ 女王ヘイカのお言葉。
- ④ 畑をタガヤす。
- ⑤ 知識のホウコ。
- ⑥ 密閉の容器。
- ⑦ 利己的な考え方。
- ⑧ お手洗いを拝借する。
- ⑨ 年配の女性。
- ⑩ 鋼鉄のレール。

問二 高校生の百合子さんと先生が、内閣府男女共同参画局のホームページを見ながら会話しています。これを読んで、後の問いに答えなさい。

百合子 「先生、進路を決められなくて困っています。どうしたらいいですか。」

先生 「自分の興味があることから考えるといいですよ。百合子さんは何に興味がありますか。」

百合子 「私は昔からプログラミングに興味があつてそれが学べる大学を探していましたが、父に『女子だから理系は向いていない』と言われました。」

先生 「性別を理由に選択肢を狭める必要はありません。OECDという国際機関によると、十五歳の日本の女子の科学や数学の

学習到達度は、他の先進国の男子の平均よりも高いです。決して女子は理系科目が苦手ということはありません。しかし、こ

の**資料1**から分かるように、進路選択は性別によって差がありますね。特に**A**の進路を選ぶ女子は少ないです。」

百合子「本当だ。でも私は女性だからということにとらわれず、本当に進みたい道を考えてみます。」

先生「ぜひそうしてください。応援します。」

百合子「大学卒業後についても考えておきたいです。女性だからといって仕事の機会を奪われたくないな……。仕事では、性別による差がありますか。」

先生「**資料2**を見てください。これは、労働時間に関する世界のデータです。労働は、会社で働くなどして給料がもらえる

有償労働と、家庭内の育児・家事・介護等の給料がもらえない無償労働とに分けられます。日本の状況を外国と比べると、

Bということが分かります。」

百合子「私が働くころには、働き方が見直されて、労働時間が短縮されて性別による偏りもなくなってほしいです。」

先生「**資料3**も興味深いですよ。企業の役員に占める女性の割合のグラフです。」

百合子「**C**の三カ国が非常に低いですね。女性だとリーダーになることは難しいのでしょうか。」

先生「二〇三〇年代には誰もが性別を意識することなく活躍できる社会になることを目指して、第五次男女共同参画基本計画というものが決められました。百合子さんは、自分や周りの人の「女性だから／男性だから」という思いこみにとらわれないところから始めていきましよう。」

(1) **A**にあてはまるものとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人文科学、教育、農学、薬学・看護学等

イ 社会科学、理学、工学、医学・歯学

ウ 理学、工学、医学・歯学、薬学・看護学等

エ 人文科学、社会科学、理学、工学

(2) **B** にあてはまるものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 男性の有償労働時間が極端に長い
- イ 女性の総労働時間が極端に長い
- ウ 男性の総労働時間が他国より短い
- エ 無償労働が女性に偏っている

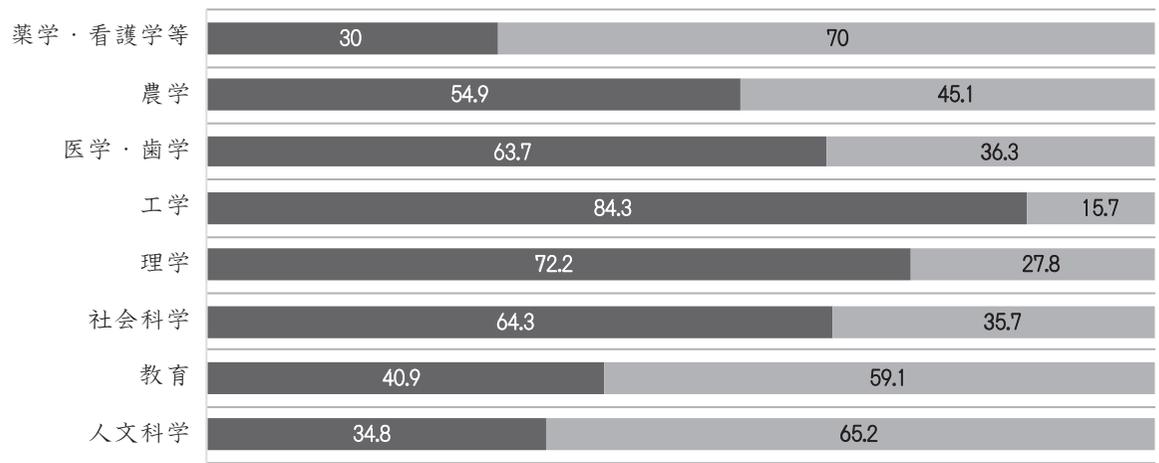
(3) **C** にあてはまるものとして最もふさわしいものを次から選び、

記号で答えなさい。

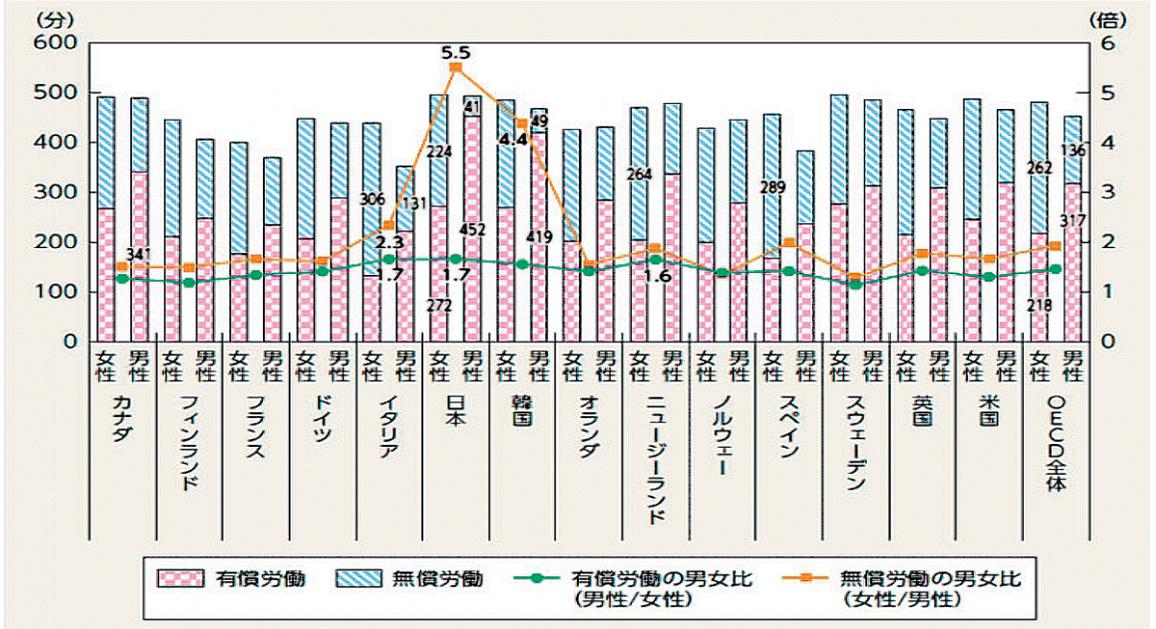
- ア ヨーロッパ
- イ アジア
- ウ 北アメリカ
- エ オセアニア

資料 1

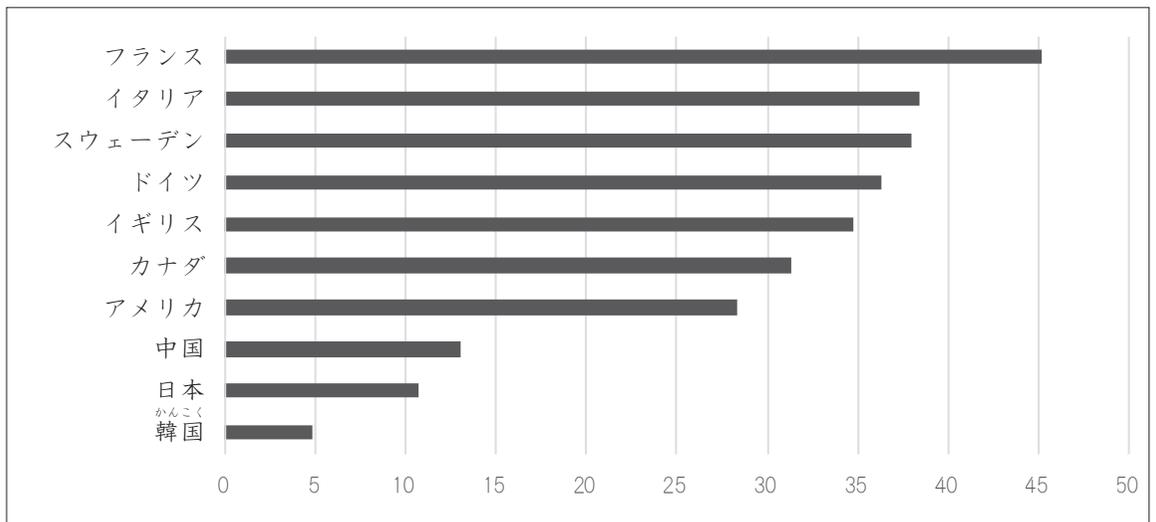
■ 男子 ■ 女子



資料 2



資料 3



資料はすべて内閣府男女共同参画局「みんなで目指す！SDGs×ジェンダー平等」より引用・加工

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

高校生の星崎芽以は、市役所に勤める父と二人で暮らしている。母は芽以が生まれて一年後に病気で亡くなり、父は毎日夕食の支度を
して芽以を待っている。芽以は自分の学力や卓球部での実力、容姿などが可もなく不可もなくという程度であり、周囲との関係において
目立たない存在であることを自覚していた。

「あれ？」

クラスメートの木村さんが弁当をしげしげとのぞくので、芽以は怪訝な気持ちで顔を上げた。木村さんとは休み時間ときどき雑
談くらいはするが、特別仲がいいわけではない。

「え、何？」

あ、ちょっと待って、と言いながら、木村さんはスマートフォンの液晶画面をスクロールしている。

「あー、やっぱりそうだ、ぜったいこれだよー！ だってだって、弁当箱おなじだし、その果物入ってるタッパーも同じだし！」
木村さんが画面を芽以の前に差し出した。そこにはお弁当の画像があった。楕円の曲げわっぱに、半分は色とりどりのおかず、半
分は白いご飯。ご飯の真ん中に梅干しが一つ鎮座している。おかずは唐揚げと卵焼きと茹でたブロッコリーとミニトマト。別の小さ
いタッパーにバイナップルが入っている。なんのへんてつもない弁当である。

だが、それを見た瞬間、芽以は青ざめた。まぎれもなく、父親が自分のためにいつか作ってくれた弁当だったのだ。

「何、これ……」

芽以は① 声を絞り出すと、木村さんの手からスマートフォンを奪い取り、その写真が掲載されているブログを、ぐんぐんスクロー
ルしていった。

次から次へと、自分がかつて食べたお弁当が現れる。記憶の底で溶けて消えかかっていたそれらが、まぎれもなく蘇ってくる。
まぎれもなく、自分の弁当だ、と芽以は思った。お父さんが毎朝作って自分に渡してくれた、弁当。

「私のだ……」

芽以がつぶやくと、木村さんの目が輝いた。

「でしよう？ やっぱ、星崎さんのだよね！ わー、すごい！ 本人目の前にいたんじゃん！ てか、星崎さん、これ知らなかったの？」

「……知らなかった」

芽以がぼつりと答えた小さな声にかぶせるように、え、なになに、見せてー、と女子たちがまわりに集まってきた。

「これ、けっこう人気なんだよ、一回、ネットニュースにもなって。だから知ってて、ずっと追いかけてただけだよ」

*2 ブログのタイトルは「愛娘のための

まなむすめ

の今日もがんばる親父弁当」だった。

*3 シングルファーザーの

「親父」

ががんばって作る、とい

う *4 コンセプトで、娘のための毎日の弁当を披露している。キャラ弁のような派手さはないが、素朴で親しみやすく、思春期の娘の

ための弁当を父親が作っているという点で注目を浴び、じわじわとファンが増えているらしい。

「今日の半熟卵は水から火にかけてきっかり8分！」 *5 ごま油が茄子を甘くしてくれる”といった役立つひと言コメントも人気を後押ししているようだ。

「これ、星崎さんのお父さんのブログだったんだ!？」

②「お父さんが作るってえらくない？ うちのお父さんなんて、林檎の皮も剥けないんだよ」

「いいなあ、おいしそう」

「すごいちゃんとしてる。星崎さん、愛されてる」

自分の平凡な弁当に突然クラス中の注目が集まり、芽以は大いに戸惑ったが、苦笑いを浮かべるしかなかった。

「星崎さんのお父さん、ずっとシングルファーザーでがんばってるんだ……」

誰かがぼつりとつぶやいたセリフが、騒いでいたクラスメートたちを一瞬にして、しんとさせた。ブログのタイトルの下には、「娘

が一歳二ヶ月のとき、妻は虹の橋を渡りました。妻が空で安心できるように、親父は今日もがんばります！」という文章が添えられていた。

「……」

「芽以の家、そうだったんだ……」

同じ卓球部で仲良くしている未奈美がしんみりした声で言った。

「あ、うん、そう」

芽以は答えながら、食べていた弁当の蓋をぱたりと閉じた。

「別に、秘密にしていたってわけじゃないよ。でも、わざわざさ、言う必要もなかなーって、ははは」

「ないかなー」のところで身体を斜めに傾けて、ポップに答えて笑ってみせたつもりだったが、誰も笑わなかった。芽以は、脇の下に変な汗が滲むのを感じた。

父親が毎日食事を作ってくれることは、物心ついてからずっとそうだったので、**A** だと思ったことはない。高校一年の今のクラスメートには、自分の家が父子家庭であることは特に伝えていなかった。

母親が幼い子どもを残して死んでしまったことを知っている人たちの間で、微妙な気遣いのような空気が生まれる。それは、芽以をいつも憂鬱な気分にした。母親が死んでしまったかわいそうな子ども、という認識のもたらず、なんとなく腫れ物にさわるような重い空気とよそよそしさ。あるいは逆に生まれる妙ななれなれしさ。そして、遠くで自分を指さしながら言われる、「あの子、お母さん死んじゃったんだって、かわいそう」というささやき。聞きたくもないのに、なぜかそのセリフは、すぐそばでささやかれたように無遠慮に耳にしのびこんできて、胸に刺さった。「かわいそう」という言葉は、その言葉をはっきりと理解することができなかつた頃から、芽以は雨のように浴びてきた。正確な意味は分からなくても、自分が特別扱いされている居心地の悪さは感じていた。

こっちが子どもで言い返せないからって、なんでも言っているんじゃないよ、と、その頃のまわりの大人たちの様子を思い出しては、芽以は腹を立てていた。保育園でも、小学校でも、中学校でも、「あの子のお母さん、死んじゃったんだって」がつきまとい続けることに心底うんざりしていた。だから、地元の子が誰も行かないような少し遠くの高校にあえて進学したのだ。自分のことを誰も知らない場所に身を置くことができて、芽以は心からほっとした。こちらから口に出さない限り、誰も親のことなど話題にしない。自分は、ありきたりの、どこにでもいる、「まあまあ」な女子高生でいることができるのだ。そのことが、何より安らぎになった。

なのに、今、**③**それが崩れた。父親の、弁当プログラムのせいで。ふっと足元が揺らぐような感覚に襲われた。

自分が話題の発端を作って気まずい空気にさせてしまったことに責任を感じたのか、木村さんが「ま、まあ、あれだよねえ」と高めの声を出した。

「照れくさいとは思うけどさ、星崎さんもううれしいよね、こんだけ愛されてるのがわか……」
「こんなの！」

木村さんの言葉を断ち切るように、芽以は大きな声を出した。

「うれしくない！ 迷惑めいわくなだけ！」

自分でも、言っではいけないことを言ってる、と思った。でも、止まらなかった。

「こんなの、どこがすごいのか？ 全部、全部別に、普通ふつうじゃん、普通の弁当じゃん。これ、お母さんが作ったお弁当だったら、誰もなんにも言わないよね。なんで父親が作ると、みんなおもしろがるのか？ すごいってなるのか？ お母さんが死んでるから？ ねえ、なんで？」

「芽以、やめなよ！」

未奈美が、芽以の肩かたに手を置いてその言葉を遮さえぎった。芽以は、はっと我に返った。

「ごめん、と誰にも聞こえないような小さな声で芽以はつぶやいてから、机の上の弁当箱を乱暴につかんでリュックサックに投げ入れた。そしてリュックサックのストラップを片方だけ引っかけ、教室を飛び出した。④ 未奈美が何か言いながら追いかけてくるのを振り切って、全速力で階段を駆け下りていった。」

帰宅した父親が、わっ、と声をあげたので、ダイニングテーブルに制服姿のまま突つ伏ぶしていた芽以は、顔を上げた。

「なんだ、もう帰ってたのか」

そんなところで電気も点けないで、と言いながら、父親がダイニングルームの電灯を点けた。

「今日は部活なかったってこと？」

「部活は、休んだ」

芽以は沈しずんだ声で言った。

「休んだって……どうした、具合でも悪いのか？」

「具合……悪い」

「え、大丈夫か？　なら、着替えて横になったらどうだ？」

「具合悪いのは、身体じゃない」

「身体じゃない……って、あ」

父親の表情が変わったのに気づいて、芽以は思わず目をそらした。

「何が、あったんだ？」

父親は、やさしく話しかけながらポケットからハンカチを取り出した。紺色のおじさんハンカチが目の前に迫ってくる。自分の濡れている頬をハンカチで拭おうとしているのだ、ととっさに察知した芽以は、ばしっと父親の手をはね返した。反動で父親はハンカチを取り落とした。

「え、なん……で？」

父親は目を見開いた。芽以はテーブルに伏せていたスマートフォンを持ち上げ、驚いた顔のまま固まっている父親に液晶画面を向けた。

「これ」

「え……あ……！」

「だよね」

「やあ、ばれちゃったかあ」

父親の顔に照れ笑いのようなものが浮かんだのを見て、芽以の胸にもやっとした苛立ちが生まれた。が、父親の方も敏感に芽以の心の動きを感じ取り、すぐに真顔になった。

「今、泣いてたのって、もしかして……これのことなのか？」

「……」

「ブログに、弁当のことを上げたから、怒ってるのか？」

「……お弁当は……」

「ごめん、悪かった、勝手に……」

芽以はうつむいて首を横にふるふると振った。

「お弁当は、ありがたいと思ってる。ほんとに感謝してる」

そう言いながら父親を見上げた芽以は、また涙が込み上げてくるのを感じた。

「でも、嫌だった……」

B と涙がこぼれた。

「学校で、嫌なこと言われたのか」

「……違う」

芽以は、手で **C** と顔をこすった。

「嫌なことなんて、別に言われてない。みんな、やさしかった。すごいって言ってくれた。おいしそうって」

「そ、そっか……。じゃ、なんで……」

「すごいよ、お父さんは、すごいよ、ほんとすごいって、私も思う。わかってる」

「うん、実はな、父さんも、自分はすごい、がんばってるって思ってた。でも、そう思われるようなことをわざわざアピールするってどうだろう、ってことだよな。いや、これでも、人に褒められると、がんばれる気がしてたんだけど、そうだな、やっぱり、弁当も

プライベートの一つだからな、勝手に載せてたのは、悪かった。ほんと悪かったよ」

「謝らないでよ」

「え？」

「悪かったって、言わないで」

「う……」

「悪かった」を封じ込められた父親が、言葉につまった。芽以は、父親を追いつめてしまったような気がして、胸が **D** とした。

「そんなこと言われても、だよな。でも、お父さんに謝ってほしいわけじゃない。謝られても、私、困る」

「困る……？」

「今日、お弁当食べるときに、あのブログと同じ弁当だっことを言われて、だから、うちがお母さんのいない家だっこともわかつ

て、それがなんか私、すごく嫌だなんて思って、学校を飛び出して帰ってきちゃったから、みんな心配してLINEとかくれて、謝ってきてるみたい。それが、辛い。別にクラスの子だれも悪くないし。私が一人で怒って、空気悪くしたただけだし。だからもう、LINE見るの怖い。さっきからずっと開けない。そしたらなんか、泣けてきた。何これ。なんなのこれ。もうなんだかよくわかんないよ、わかんなくて、笑える」

芽以は涙を流しながら、ははは、と空々しい笑い声を漏らした。

「つまり、その、あれだ。とにかく、特別扱いしてほしくないってことだな」

芽以は父親の言葉に、はっとしたように目を見開き、**E**と頷いた。

「そう。誰にも、私のこと特別だと思ってほしくなかった。だって、だって普通のことだもん、私にとっては、全部」

そう言いながら、涙がすうっと引いてくるのを、芽以は感じた。

「じゃあ、どうしたらいいんだろうな」

「うん……」

「芽以の普通が、他の子たちにとっては、ちょっとだけ普通じゃないんだ。でも、芽以が自分の普通を理解してほしいなら、その子たちの普通を、芽以も理解してあげなくちゃいけないんじゃないかな。それぞれの“普通”が同じじゃないから、それぞれが素敵に見えるっていうのも、あるだろうしさ」

「……うん。やっぱ……お父さん、すごい」

「いや、まあ、長いこと大人やってるからな」

「お父さんがシングルファーザーになったのって、何歳？」

「二十七歳だね」

「若っ」

「若かった。でもさ、お母さんが命がけて残してくれた芽以は、めちゃくちゃかわいかったから、思い切りがんばれたよ。若いからこそがんばれたのかもしれない。芽以のためにしてあげたいことを覚えるのは、実はすごく楽しかった。料理とか、化学実験と同じだなと思ってさ。ほら、もともと理系だからさ。料理とか家事とか、実験みたいなものだよ。ブログで実験の成果を自慢してただけ。」

その意味では、芽以が言うみたいに普通の人と同じ」

「うん」

「でもあれだな、シングルファーザーという付加価値を付けて同情を引いたうえでの自慢っていうのが、嫌な感じだよな、考えてみれば」

「だけど、よく考えてみれば、それはほんとのことだから、堂々としていいんだよ。そうだよ。なんでこれまで私、堂々どできなかったんだろ。こうやって、お父さんと二人でちゃんと生きてること、すごい自慢なのに」

「そうだ、自慢しよう、堂々と、普通に」

「うん、普通に……。って、なんだろ、普通って、バカみたい……。もういいよ、お父さん」

「もういい？」

「もう、がんばらなくてもいいよ、私のために」

「え……？」

「って、私が思うことにする。ずっとお父さんは私のためにがんばってくれてるんだって思ってきた、その私の気持ちが息苦しかったってこと。みんなが自分のために気を遣ってくれてるって思ってしまう自意識過剰な気持ちが重かったってこと」

「ほう、なるほど」

「だからいいよ、プログ、続けなよ。私、お父さんのこと、承認欲求高めの蘊蓄好きな自慢おじさんって、気楽に思うことにするから」「ずいぶん言われようだなあ。よし、そうとなったらこれからも遠慮なくウザめにやらせてもらうことにする。さて、今日は、明日の弁当のおかずにも使える鶏そぼろをこれから作るんだが、よりきめの細かいそぼろを作るには、弱火でじっくり炒めるのが肝心なんだ。何しろ肉のたんばく質は五十度くらいで固まりはじめるからな」

「わかった、今日は私もそれ手伝う！ でもその前に、制服、着替えます！」

芽以は元氣よく片手を上げた。

(東直子『ひとつこひとり』所収、「もういいよ」)

(注)

- * 1 スクロール……コンピューター上で画面に映っているものを上下左右に動かすこと。
- * 2 ブログ……インターネット上で日記や趣味等しゆみを公開するものこと。
- * 3 シングルファーザー……一人で子どもを育てている父親のこと。
- * 4 コンセプト……考え方の方向性のこと。

問一——線部①「声を絞り出す」とありますが、ここからどのような気持ちを読み取れますか。最もふさわしいものを次から選び、

記号で答えなさい。

- ア 自分のお弁当のおかずがなんのへんてつもないことをクラスメートに知られてしまい、恥はずかしい。
- イ 自分のお弁当の画像が知らないうちにインターネット上に掲載けいこされたことに驚おどろき、あせっている。
- ウ あまり親しくない木村さんにインターネット上の自分のお弁当の画像を見つけれられてしまい、くやしい。
- エ 父親が作ってくれたお弁当は色とりどりのおかずが入っていたことに、改めて感謝し、感動している。

問二——線部②「お父さんが作るってえらくない？」とありますが、この発言はどのような考え方によるものと思われませんか。

最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

- ア 男性は不器用である人が多く、家庭料理の調理には向いていないという考え方。
- イ 男性は全てにおいて優れており、男性が調理を担当する傾向けいこうがあるという考え方。
- ウ 男性よりも女性が調理を分担する家庭が、依然いぜんとして日本では多いという考え方。
- エ 男性も女性と同様に家事をしていることは、近代的であるという考え方。

問三 に入る言葉について、

(1)適切な漢字二字のものをこれより後の部分から探し、書きぬきなさい。

(2) (1)の言葉と反対の意味を持つ言葉として用いられている漢字二字を、これより後のクラスメートとの会話文から探し、書きぬきなさい。

問四 ——線部③「それ」の指している内容を次の文でまとめています。 にふさわしい八字を本文より探し、書きぬきなさい。

芽以の母親の死を周りの人が で、「まあまあ」な女子高生として生活できる安心感。

問五 ——線部④「未奈美が何か言いながら追いかけてくる」とありますが、どのようなことを言っていたと考えられますか。

最もふさわしくないものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 私がその場の空気を気まづくする原因を作ってしまったって、ごめんなさい。

イ 芽以の話している時に、私が口をはさんでしまっただごめんなさい。

ウ 言ってほしくないことをうっかり言ってしまって、ごめんなさい。

エ 芽以の家のことをみんなで無遠慮ぶえんりょに盛り上がってしまったって、ごめんなさい。

問六 に入る言葉として最もふさわしいものを次から選び、それぞれ記号で答えなさい(記号の使用は一回のみ)。

ア ぼろぼろ

イ ちくり

ウ ほんわか

エ こくり

オ きちん

カ ごしごし

問七 文章全体をとおして、芽以の考え方がどのように変化していったのかを、七十字以上、九十字以内で説明しなさい。

三

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、問いに字数指定がある場合には、句読点なども一字分に数えます。

ステイヴン・スピルバーグ監督が2018年に公開したSFアクション映画『レディ・プレイヤー1』は、「オアシス」と呼ばれるVR世界での人々の交流を描いたものです。舞台は近未来、貧富の差が進み、人々が現実に見出しづらくなか、VRゴーグルを被るだけで誰もが何者にでもなれるのが「オアシス」でした。そこで、主人公のウェイドは、アルテミスと出会い、恋に落ちてしまいました。その2人がダンスをしながら言葉を交わします。

ウェイド ① リアルで会えない？

アルテミス 幻滅するよ

ウェイド しない 君が好きだ

アルテミス 知らないくせに これは仮の姿 **a** 本当はこんな体でも顔でもない

ウェイド 関係ない 君の本名は？ **b** ぼくはウェイド 本名は…

アルテミス やめて 正気？ **b** 本名なんて言っちゃダメ

ウェイド 君は特別だ

アルテミス **c** 知らないくせに 会ったこともない

ウェイド 君を知ってるよ 好きなんだ (中略) 君に恋してる

アルテミス **d** 勘違いよ この姿は私が見せたい自分 それに恋してるの

—— 『レディ・プレイヤー1』より

この2人の会話は、仮想空間における「顔」の問題をありありと表しています。なぜウェイドは、仮想空間ではなく、リアルでアルテミスに会いたいのでしょうか。オアシスのアバターは、現実世界の人間と比べてまったく遜色のない自然な表情や動きを体現しています。そのため、仮想空間はコミュニケーションの質が低くてもどかしいからリアルで会いたい、という理由ではないでしょ

う。なぜ仮想空間の中でデートするだけでは満足できないのでしょうか。

おそらくその答えは、ウェイドの「君は特別だ」という言葉に対する、アルテミスの「知らないくせに」という返事の中にあるのかもしれません。現実世界における彼女の素顔を知りたいと強く思うウェイドの気持ちと、素顔を知らないのに、そんなことを言うのは勘違いだ、というアルテミスの気持ちがある^{*2}。交錯する^{*2}のは、「素顔を知る」ことが両者にとって重要な意味を持つからです。なぜ、私たちはそこまで素顔にこだわるのでしょうか。

哲学者の鷺田清一は、『顔の現象学』という著作の中で素顔について以下のように考察しています。

われわれがある顔を素顔としてとらえるときには、その背後に、一つの^{*3}人称的な存在、「だれか」(II人格)としての自己同一性と連続性をもち、顔の外面性に対しては内面性としてとらえられるべき存在が透かし見られており、そういうものとの関係のなかで顔がとらえられているわけである。素顔においてはだから、「顔」は「わたし」との関係のなかで組織されているのである。

——鷺田清一著『顔の現象学』（講談社学術文庫、1998年）、55頁より

つまり、この考えを先ほどの映画に当てはめると、素顔というのは、アバターのような仮面とは異なり、その人の内面と同一線上にあるために、相手の内面を深く知るためには、どうしても素顔を通して関わりたくなるのです。また、素顔を知られていない状態においては、自分の内面性を本当には理解していないから、あくまで仮想の関係性だというわけです。

さらに、これまでの章で見てきたように、鏡や写真の登場により、他者目線に基づく自分の顔の認識・評価というものが自己意識の中に入り込んできたことにより、素顔は単に内面を透かし見せるものではなく、内面に大きな影響を与えています。そうになると、なおさら「素顔」が「わたし」を具象化するものとして、重要性を増してくるわけです。

それでは、そもそも顔がなければ、私たちの自己はどうなってしまうのでしょうか。

この問題を徹底的に掘り下げたのが、1964年に出版された安部公房の小説『他人の顔』です。この小説の主人公は、化学実験中に液体空気の爆発により顔全体に大やけどを負って顔を喪失してしまっています。

この小説は、人間という存在のなかで、顔というものがいかに大きな比重を占めていたかを浮き彫りにしています。まず、主人公は顔の喪失により、周囲のよそよそしい、上辺だけの反応に強いショックを受け、顔に「ぼっかりと深い洞穴が口をあけた」ような幻覚に襲われます。すると医者おそのK氏は主人公に語りかけます。

「顔というのは、つまり、表情のことなんです。表情というのは……どう言ったらいいか……要するに、^②他人との関係をあらわす、方程式のようなものでしょう。自分と他人を結ぶ通路ですね」（中略）

「人間というやつは、他人の目を借りることですか、自分を確認することも出来ないものらしい。（中略）通路をふさぎっぱなしにしておくと、しまいには、通路があったことさえ忘れてしまうものなのです」

——安部公房著『他人の顔』（新潮文庫、1968年）、37、38頁より

これらの言葉が意味するのは、自分の存在というのは、他者の反応を通して想像するしか知りえないもので、それを*4媒介する顔を失うと、自分の存在すら揺らいでしまうということです。

A、顔の喪失は、社会との関係だけでなく、自己すら消滅させかねないわけです。

B、小説の主人公は、他人の顔を模った精巧な仮面を被ります。

C、彼はとてつもない解放感を感じ、それをこう表

現します。

「ぼくは、名前も、身分も、年齢もない、仮面の陰に身をひそめ、自分だけに保証されたその安全さに、勝誇ったような気分になっていた。連中の自由が、磨りガラスの自由なら、ぼくのは完璧な透明ガラスの自由だ」

——安部公房著『他人の顔』（新潮文庫、1968年）、214〜215頁より

ある意味、素顔は私たちを一つの自己に縛り付けていると言えます。仮面を被ること、仮想空間でアバターを使用すること、偽物の顔写真を使うことにより、素顔にとらわれている自己から解放されるのです。それは前に紹介した^{*5}プロテウス効果でも実証されていることです。

しかし、本当に仮面は自己を解放するのでしょうか。鷺田は、『顔の現象学』の中で、^{*6}ディディリユベルマンの見方を取り上げています。

たしかに仮面はひとの顔を覆い隠しはするが、そのとき仮面は、顔を覆うことによって、その顔が隠しているものをあらわにする。

——鷺田清一著『顔の現象学』（講談社学術文庫、1998年）、117頁より

本節の冒頭で紹介したアルテミスのセリフにも、「**D**」とあります。仮面やアバターには、自己が抱える願望や^{*7}葛藤がうつし出されており、本当の意味では自己から解放されてはいないのでないでしょうか。

つまり、素顔であれ仮面であれ、外面は常に自己の内面と深い関わりを持っており、しかも、その自己の内面は、外面の影響を受けて容易に変化する、^{*8}可塑的で不安定なものなのです。そして、いずれの外面も、他者の反応から自己の顔を想像するという点で、自己と他者の関係性からつくられる想像的共有物なのです。しかし、それがないと、私たちの自己は不安定になり、他者との関係も上手く機能しなくなるのです。つまり、本物の顔であれ偽物の顔であれ、「顔」というものは、私たちが社会で生きていくうえで、^③必要不可欠な通路なのです。

（中野珠実『顔に取り憑かれた脳』）

（注）

*1 遜色……おとっている様子。

*2 交錯……いくつかのものがいりまじること。

*3 人称……動作の主体が、話し手・聞き手・第三者のいずれであるかの区別。

* 4 媒介……二つのもの間にあって、両者の関係のなかだちをすること。

* 5 プロテウス効果……オンラインゲームなどの仮想空間上のアバター（自分の分身となるキャラクター）の見た目がユーザーの行動特性に影響を与える、とされる心理効果のこと。変身効果とも呼ばれる。

* 6 デイデイルユベルマン……哲学者、美術史家。

* 7 葛藤……心の中に相反する動機・欲求・感情などが存在し、そのいずれをとるか迷うこと。

* 8 可塑的……思うように物の形をつくれること。

問一 —— 線部①「リアルで会えない？」と聞いているのはなぜですか。二十字以内で本文の言葉を探し、「くから。」につながるように書きぬきなさい。

問二 —— 線部②「他人との関係をあらわす、方程式」とありますが、ここからどのような筆者の考えが読み取れますか。最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア 人間は他人の目を借りることでは、自分を確認することができないので、仮面を必要とすること。

イ 自己の存在を保っていないと、社会との関係に縛り付けられてしまうので、顔は大きく影響すること。

ウ 他者視線に基づいて、自分の顔を認識・評価するということが通常なので、素顔は共有物でないということ。

エ 他者の反応を通して想像することでは、自分の存在は知ることができないので、表情が重要だということ。

問三

A	く	C
---	---	---

に入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア A そして B B しかし C C やはり

イ A しかし B B つまり C C そして

ウ A A つまり B B そして C C すると

エ A A やはり B B すると C C しかし

